**土生重次**

**自選句　１**

春闘の文字右にはね貨車の胴  
畳一枚ほどのげんげ田廃坑区 早蕨の渾身こめて握るもの  
春愁や髪にかくるる耳飾 花ぐもり鳩のおくびやう鳩時計  
賑やかな子等の殺気に油虫 蟷螂の腹ひやひやと掌に這はす 大の字に寝て一畳の九月尽 ライターの炎のついとのびて冬 マヌカンに恋のまなざし春隣 切株の上にしばらく落ち椿 てんたう虫指輪なき子の指かざり  
毛虫ゆく地の凹凸に息あはせ  
うらがへる脚こまごまと金亀子  
峯雲や朱肉くろずむ村役場 炎天の尻から動く貨車の列 針金の脚ふんばって水馬  
唾のめば耳ぽんとあきお花畑 白桃の柔毛の中の古き傷  
星月夜眠りのふかきインク壜 人の影みな円錐に夜の焚火 枯野来て犬の目に錆ひろがれり  
寒灯やますめはみ出す父の稿  
冬晴の子の手にあまる裁鋏  
ひとひらがひとひら誘ひ牡丹雪 はぢらひを二重瞼に冬の象 かんな屑ひところげして春きざす 春寒の胸より背ナへ聴診器 恋猫や文字蛍光の置時計  
春昼の種火ひつそり湯沸器  
春塵の針のものぐさ花時計  
春の蝿すでに無頼の脚をすり  
ことごとく刺す意あらはに薔薇の棘  
筍をむく妻怒り指に出て 改札口ともにぬけきし天道虫 お花畑に覚めて東西見失ふ 夕焼けや跼まりて聞くねだりごと 蚊柱の崩れ統べゐしものの去り  
向日葵に日を追ふ疲れ倉庫街 鶏頭の肉色獄の塀の外 西にゆくほど肌理こまか鱗雲  
星づくよ行間ひろき子の手紙  
藁塚のかくもかたむく思案ごと  
十重二十重守るものなし稲架の陣  
秋灯や茶碗に唐子模様跳ね  
一物もなき胸ひろげ案山子立つ　　　　　　熱燗や爪から老ける土工達　　　　　　　　寒すずめ居心地あしき鍬の柄に  
行く年を見るガラス戸に額つけ 白破魔矢買ふ射るもののあるごとく 浮き寝鴨水の底より子守唄  
親の水尾みだし子鴨の悪太郎 花冷や色にぎやかに裁縫箱  
いまだ恋しらぬ指もて雛納め  
利休忌やひきがねあまき火縄銃 かがまりて蟻に小言の末娘  
風音に闇のふくらむ今年竹  
明滅の滅のみじかく沢蛍  
尺とりの尺とりやすき方へゆく  
引越しの荷物最後に蛍篭 くわくこうや風の告げくる雨催 背に隙をみせて鳴きつぐ油蝉　　　　　　　病葉や昼の屋台は縄で閉ぢ　　　　　　　　手花火に照らしだされし手のゑくぼ

籐寝椅子星天井をひとりじめ  
卵黄に血の紐の浮き油照

かなかなや妻の力のにぎり飯

燈火親しむインクにも鋼の香 仕舞湯の底に砂粒ちちろ虫  
雁の夜の一画欠けし蔵書印  
掌をそらすごとく芋の葉露こぼす

大年や灯を消せばさす母屋の灯  
銀行の鉄扉のまへの飾売  
抱けばすぐ眼つむる人形クリスマス 寒暁の握りまるめし反故はじけ  
つま先にいつも木の影冬の坂 あふむけに鉋やすませ冬日和  
暗き方めがけてばかり追儺豆  
雪嶺へはぐれ鴉の真一文字  
糸巻に糸のぎつしり凧日和  
散りやすきものをうかべて春の水  
釘ぬきに釘きしませて西東忌 雛の夜ひとつおぼえのわが手品 花冷や指になじまぬ皮表紙 背をむけし方へ日の入る汐干狩  
寺の水はばからず汲み植木市 葉ざくらや和紙で繕ふ衣装箱

　郭公の三声でとどめ国有林  
水音のささやきに乗り水馬  
一方を神木にかけ蜘蛛の網  
山荘の留守アカシアの吹き溜る

木下闇水に笹舟すぐほどけ

虹かけて虹に染まらず海の風  
レコードにまじる傷音旱天梅雨

水底の石に日あたり囮鮎

一灯も洩らさず雨のキャンプ村

手花火の火種を妻の手より受け

ペン重き夜はことさらに稲びかり  
こほろぎの地下に施錠の音残し

ひとすぢの傷舐めて出る芒原  
蔦枯れてなほ神の木を金縛り

クリスマスケーキ一切れづつに花  
白息の花にかくれて花売女 冬の宿赤きブーツのもたれあひ 坑つらら内なるものを鉾囲ひ たたかれて鉋刃を出す冬の鵙 春寒の鳶の輪を指す避雷針 陽炎をぬけジェット機の脚たたむ  
右の肩落としてのぼる武将凧 石仏にお供への石下萌ゆる  
花冷えの木のペン皿に竹のペン  
ひとところ軋む廻廊蝶の昼 風下に本家の甍鯉のぼり  
満開のパラポラアンテナ風光る 夏きざすへこみしままの皮ソファー  
道路鏡には弓なりの青あらし いちはつや居留守の窓に灯の点り

頭の芯に痛みのつんとかき氷  
孑孑のひとふりごとに水ねばり  
玉垣の中いつせいに青あらし

指さして青芦原に風立たす

さいげんもなく呼びあうて閑古鳥

倒木の髄のずゐから梅雨茸  
通り抜け断りの札氷店  
来し方の行く方も闇のこがね虫

捕虫網子のもてあますほどの丈  
正座ゆるがず夏足袋の指かさね  
夕焼や砂州の舳先の名なし草

茅舎忌のこぼれ酒もて書く一字  
騎馬戦の後ろ盾とし雲の峰

片膝で胎の子ささへ髪洗ふ　　　　　　　　香水の香りを盗み立見席

かなかなや水の行方を風が追ひ  
西鶴忌きつねうどんに揚げ一まい

昆布煮るとろ火やさしきちちろの夜

黄落やミサの木椅子に松葉杖  
蔓珠沙華炎に炎をうつし寺有林  
蕎麦殻を枕に足すもそぞろ寒

秋の灯の奥から水を流す花舗  
討たるるも討つも滴る菊人形  
手廂に子を追ひかけて運動会

秋天や一息に描く水平線

掌に湿りくれて縄なふ神農祭

鏡台の己れにむけて妻の咳

灯の減りし方へと帰るおでんの灯

寒すずめ影あるものをいぶかしみ

枯芦の葉ずれにおくれ水の音

一灯で足る食卓のクリスマス 風紋といふささめきを冬砂丘 鱗より眼のひからびて冬の鰐  
木枯や父の手紙に誤字ひとつ  
打ち止めをわが家の前で寒の柝 願きかぬ札いぶりづめどんど焚き 立春の白湯ほのあまき寺廚 冴返る割箸に木の割れる音 多喜二忌の天地無用の倉庫の荷  
下萌や足蹴に運ぶドラムカン  
空港の土筆のいまだ寸足らず  
海流の形をとどめ焼きさざえ

水のごとき糸を紡ぎて春近し  
凍ゆるむ裏木戸へぬけ機の音

浅春の舟屋戸口は海づたひ